

第4節 弥生時代の調査成果

1 概要(第36図)

弥生時代では、調査区西側のC区においてのみ段状遺構2基(SS3・SS17)を検出した。SS3は出土土器から弥生時代後期中葉、SS17は弥生時代中期中葉ごろのものと考えられる。

2 段状遺構

SS3(第37・38図、PL.5・31)

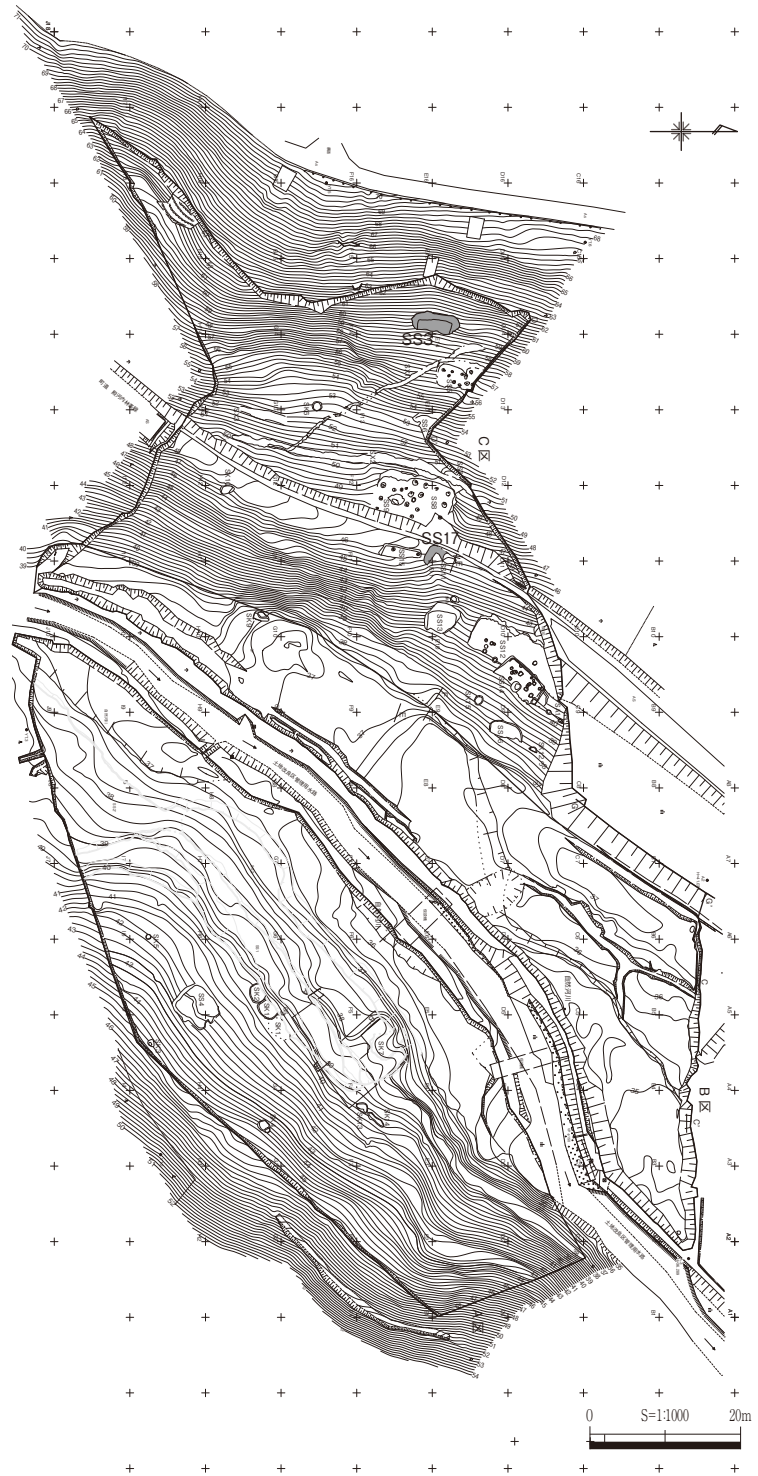
C区北西側のD14・E14グリッドにあり、標高58.9~60.5mの急斜面に立地する。東側約5mには、飛鳥時代の段状遺構SS5がある。

急斜面を長軸6.33m、短軸2.57m以上、深さ最大1.33mに亘ってカットし、平坦面を造り出している。平坦部の長軸4.37m、短軸1.76m以上を測る。東側は流失したものと考えられる。平坦面には、柱穴等の遺構は検出されなかった。

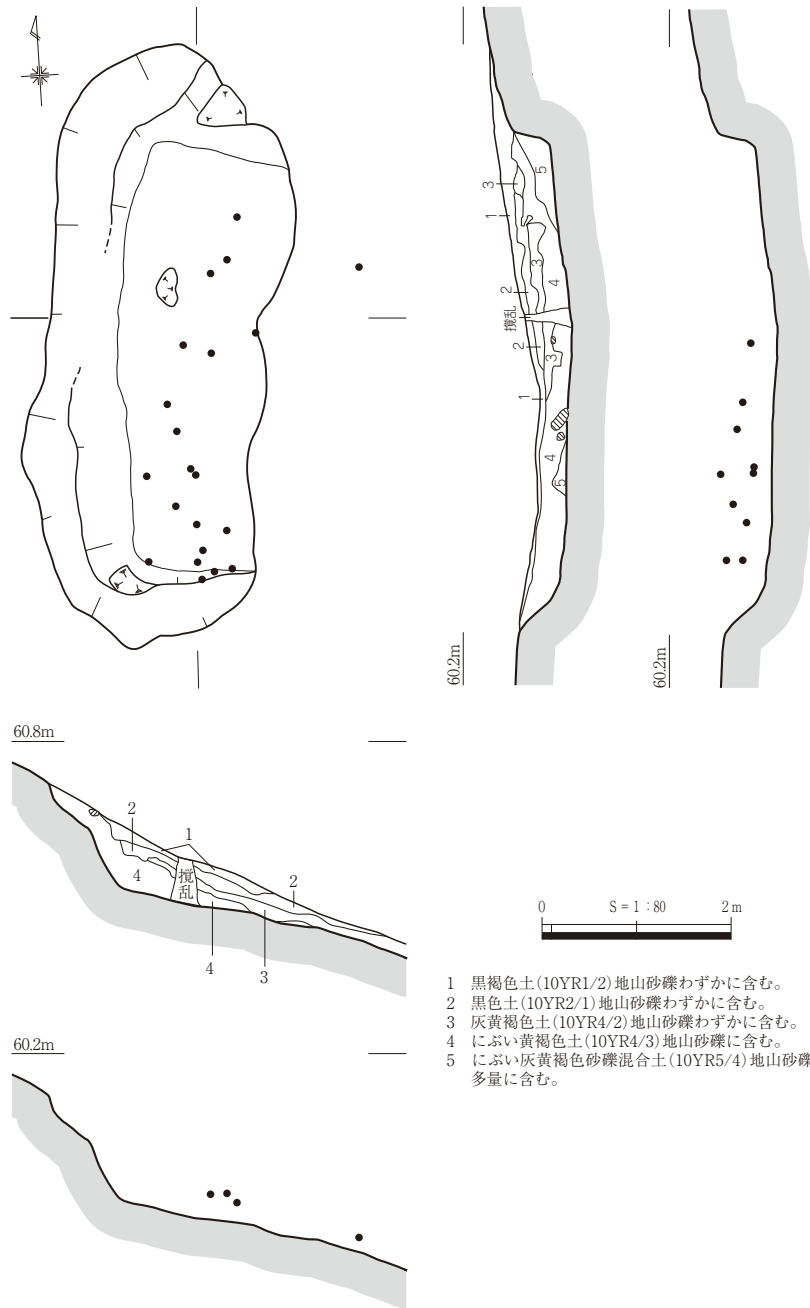
埋土は5層に分層できた。最上層は腐食土層である黒褐色土(1層)、黒色土(2層)となるが、以下は地山礫を含む黄褐色土系の埋土となる。

出土遺物は、埋土下層中の3・4層から出土したものを図化した。すべて弥生土器で、1・2は複合口縁をもつ甕で、口縁部にはやや粗い平行沈線が施される。3は「く」字状口縁をもつ小型甕で、肩部に貝殻腹縁による斜行刺突文が施される。4・5は甕底部である。

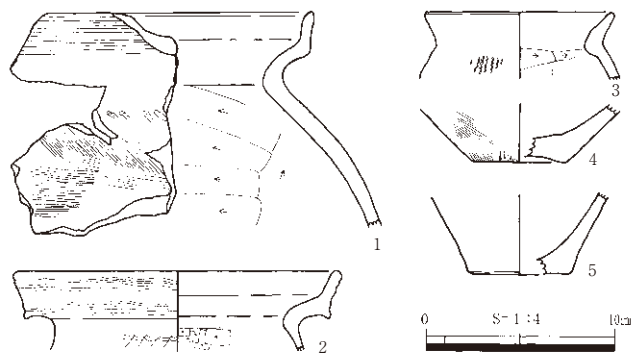
出土遺物から、清水編年V-3様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。建物等の痕跡は認められず、性格は不明であるが、簡単な上屋が作られていたものと推察する。



第36図 弥生時代遺構配置図



第37図 SS3



第38図 SS3出土遺物

SS17(第39・40図、PL. 6・31)

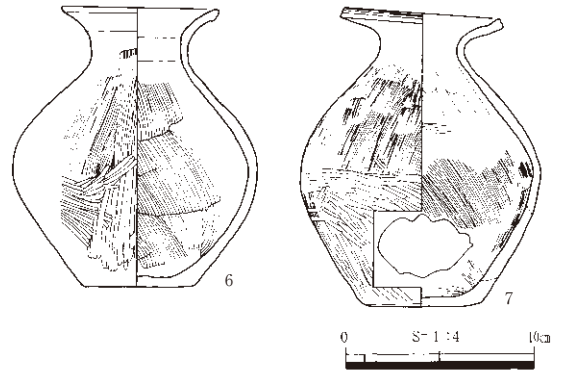
C区中央やや北側のD11・E11グリッドにあり、標高44.8~45.5mの急斜面に立地する。北側は、飛鳥時代のSS11によって掘削されている。検出箇所が、町道下部分であったため、上部は遺存していない。

遺存状態が悪く、全形を把握するのが困難であったが、急斜面を南北2.0m以上、東西2.8m以上、深さ最大0.3mに亘ってカットし、平坦面を造り出していたものと思われる。底面は、埋土と基盤層の区別が付かず、掘りすぎてしまったが、柱穴等の遺構は確認されなかった。

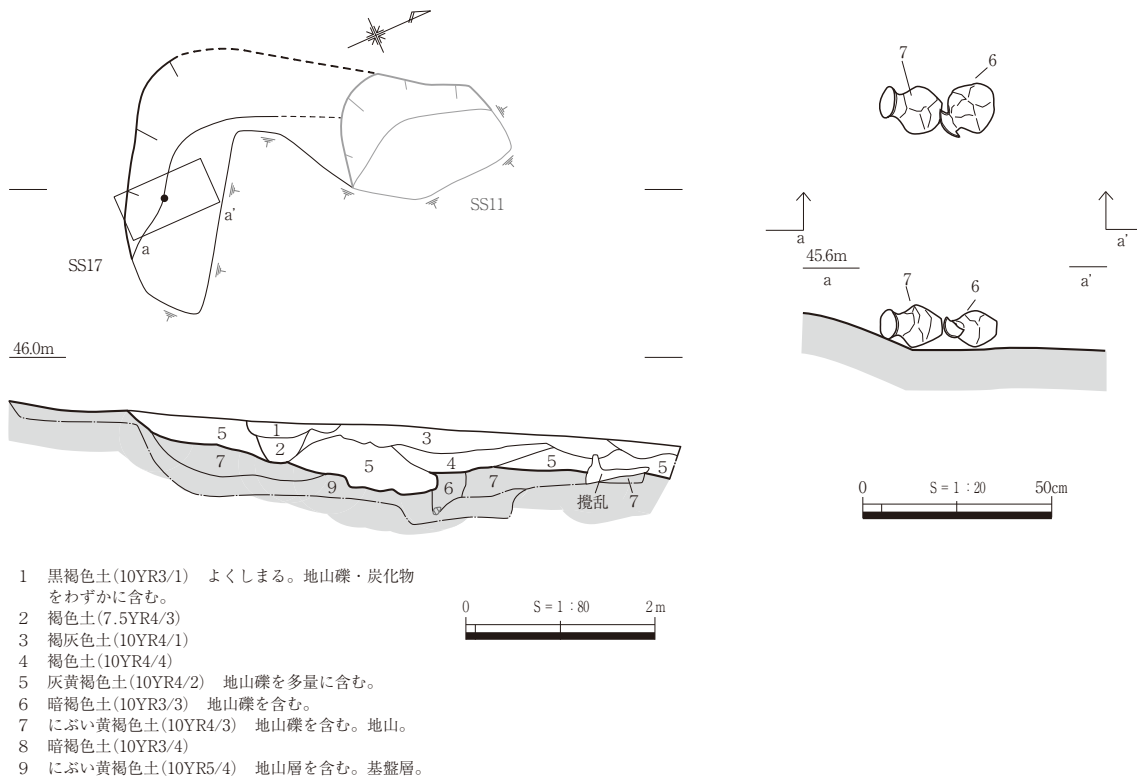
埋土は、SS11等の掘り込みなどがあり明確ではないが、5層が本来の埋土と考える。7層以下は基盤層である。

遺物は、南側底面で完形の弥生土器小型壺6・7が並んで出土した。2個体とも横倒しの状態であった。その他、検出面で土師器や須恵器片などが出土したが、いずれも後世の混入遺物である。

出土遺物から、清水編年Ⅲ-1様式、弥生時代中期中葉ごろの遺構と考えられる。建物等の痕跡は確認されなかったが、簡単な上屋が作られていたものと推察する。



第39図 SS17出土遺物



第40図 SS17